

## 我困惑ス。故ニ世界アリ。

——「環境における主体」と「客観的世界」をめぐる覚書——

## A Note on the “Subject of Environment” and the “Objective World”

南 有哲\*  
Arisato MINAMI**Keywords:** *the Subject of Environment, the Objective World*  
「環境における主体」 「客観的世界」

## はじめに

これまで筆者は、環境概念について考察をつづけてきた。本稿においては、拙稿に基づいてこれまでの私見を総括した上で 1)、環境概念を構築する上で不可欠であると考えられる「客観的世界」の概念が科学の発展によって揺らいでいることを受け、改めて「客観的世界」の何たるかについて考察する。

## 1. 環境概念をめぐる混乱

辞書的な用法においては、「環境」なる語は、「あるものをとりまく外界」といった意味で使用される 2)。一般的に、学問的な文章においては、この「あるもの」は「主体」と表現され、「環境とは常に、何らかの主体にとってのそれ」とされることが多く、「主体—環境系」などと叙述される。

一般的にこの「主体」なるものは、ヒトを含む生物の個体、あるいはその集団であることが前提とされる。しかし日常的あるいは学問的な会話や文章においても「機械の作動環境」「建造物の置かれた環境」というように、「無生物の環境」について語られることも少なくないが、「主体＝生物」を前提とする立場から、この件についての説得力ある理論的説明がなされることはなかった。

また「無生物の環境」について語る論者たちから、「なぜ無生物が環境における主体たりうるのか」という考察が発信されることはほぼ皆無であり 3)、特段の理論的問題意識を欠いたまま、「環境」と「あるものを取り巻く外部の状態」とが等置されているのが現状である。こういった理論的な混乱や曖昧さの根源は、「環境における主体とは何か」すなわち「ある存在が『環

境における主体である』とは、その存在がどのような条件を具備しているということであるのか」という問題意識の欠如にあると筆者は考えるものである。

## 2. 「環境における主体」とは何か

「環境における主体」とは一般に生物のことであると理解されているので、この主体性の内容は、生物のそれから様々に抽出されている。曰く、「認識の主体」、「実践（作用）の主体」、「評価の主体」、「環境改変の主体」「自律的・能動的な存在」、等々。しかしこれらの主体性理解は、生物が持つ主体性として比して一面的・抽象的であること、そして、特に「なぜ、そのような主体性が『環境』なる範疇と切り離せない、あるいはむしろそれを産出するのか」ということが説明できない。筆者の見解によれば、「環境における主体とは『目的を持つ（＝ある状態の実現を志向して活動する）存在』のことである」というものである。このように考える理由は以下の二点である。

第一に、このような理解は、生物というものの基本的な性質に合致している。なぜなら生物は一般に、生存と繁殖を主たる目的として活動する存在であることを、その本質として保持しているからである。したがって、このような見地においては、上述したさまざまな「主体性」を、その各側面として統合することが可能になる。そして第二に、「目的ある主体」にとって、他のあらゆる事象や物質は、その目的実現に影響する限りにおいて——促進的か、阻止的か、それらの影響は恒常的か、それとも状況によって変動するのか、といった——「価値」あるいは「意味」を有することになる。そして、かかるごとき「目的実現に対する影響」は、それら物質や事象が、主体たる生物の認識対象や

作用対象であるか否かとはい、原理的には無関係である。したがってそれら影響、ならびに影響の源泉たる他者存在は、主体たる生物の「主観性」には一切依存しない、客観的世界に属することになる。

かかるものとしての「体系としての環境」とは、これら事象や物質が主体の目的実現に対して与える影響が相互に複雑に絡み合い作用しあう、その総体のことに他ならない。そして物質が運動し相互作用するなかで多様な事象が生起する客観的世界に「目的ある主体」が出現した瞬間、客観的世界を構成する事象や物質は、それらが当該主体の目的に何等かの影響を与える限りにおいて、「当該主体にとっての環境」を構成することになる。逆に言えば、「目的ある主体」の存在がなければ「環境」なるものは存在せず、物質の運動と相互作用に満ちた客観的世界が存在するのみである。この意味において「環境の存在は主体の存在を前提とする」あるいは「主体は環境を産出する」と言っているのであり、このことは科学的实在論とは矛盾するものでは全くない。

しかるに、このことを直感的に理解することは困難であろう。なぜならば「主体なき世界」が想像された時点で、まさにその想像者自身が、想像された世界に対する「観察者」になってしまうからであり、故にその主観的世界における「主体」として、すでに立ち現れてしまっているからである。

「生物ならざるものにとっての環境」については、したがって、存在し得ないことになるが、にもかかわらずそのような言説が登場する理由としては、「生物ならざる主体」の背後に、それに利害関心をもつ観察者たるヒトが「真の主体」として存在するからだと筆者は考える。探査機器なり建造物なりに利害関心をもつ人間は、それらに影響を与える事象や物質に対して情報を集め、対応すべき判断を迫られる、すなわち「環境における主体」としての振る舞いを求められるのである。

さらに言えば、主体がその目的を実現するためには、情報を収集して評価・判断を下し、それに基づいて行動することを可能ならしめる物質的機構が不可欠である。この物質的機構にあつては、単なる物理的・化学的過程ではなく、それらを媒介に展開される記号論的な情報処理過程が存在するのであつて、そのことは生物における「内面」すなわち「主観性」の成立を意味することになる。ヒトの意識なるものは、これが高度に複雑化したものであり、その原基的なものは、極めて単純な生物にまで遡ることが可能である。また、最近の研究によれば植物にもこのような機構が存在することが指摘され、「植物神経生物学」なる学問も提唱されている<sup>4)</sup>。この観点から見ると、「環境における主体」は「経験の主体」でもあることになる。

### 3. 構成主義的環境観について

「環境は常に、なんらかの主体にとってのそれ」であり、「主体とは生物である」という理解を前提とするならば、必然的に、「環境は、それぞれの生物個体あるいは生物集団に固有のものであり、したがって単一の環境のなかに様々な主体が存在するのではなく、主体の数だけ環境が存在する」ということになるが、このような理解を突き詰めていくと、「環境のなかに諸主体が存在するのではなく、逆に主体の方がそれぞれの環境を構成する」という見地に到達し得るが、本稿においてはこれを「構成主義的環境観」と呼称する。

このような構成主義的環境観は、客観的世界の存在を直ちに否定するものではないが、その存在についての信念を大いに相対化することになる。なぜなら、環境を構成する要素が主体としての生物から独立して客観的に存在することは認めても、その要素の体系としての「環境」自体は、主体たる生物によって構成されることになるからである。筆者が紹介と考察の対象とした清水幾太郎は、1946 年という戦後早い時期において、「環境概念についての試論」という論考を発表している。そこには、後代の論者には見られないような鋭い問題提起を多く含みつつも、構成主義的環境観にかなり傾斜している。<sup>5)</sup>

「環境を構成するのは、環境要素を認知し働きかける生物＝主体自身であり、体系としての環境は客観的には存在しない」という構成主義的環境観の基本的見地は、誤謬であると考える。なぜならば、生物主体には認識されない（例えば放射線や感覚器官に探知されない有毒物質）や、生物による作用の対象にはなりえない（例えば天文学的事象）が、致命的な影響を与える要素は存在するのであつて、それらを含む「体系としての環境」などあり得ないからである。個別の環境要素のみならず、その体系もまた生物による認識や実践から独立しているのであつて、したがって「生物にとっての体系としての環境」それ自体も、客観的世界の一部をなすものと理解されなければならない。換言すれば、客観的世界が主体たる生物に対して、「体系として構成された環境」を押し付け、主体はそれを受け入れざるを得ないのである。

### 4. 環境概念の必要性について

これまで述べてきたように、私見によれば、「環境」概念の内容とは、つまるところ「主体にとっての客観的世界の在り様」に他ならない。だとするならば「主体」と「客観的世界」という二つの概念があれば十分であつて、ことさらに「環境」概念を定立する必要性はないはずである。

しかしわれわれは環境概念を必要とする。なぜなら、ほぼ同一の時空間に位置していたとしても、そこに存在する物質や事象が、例えばヒトと昆虫に対して全く

異なる影響を与える（＝意味を持つ）のは明らかであるし、生物としてのヒトと昆虫が、そのような物質や事象の体系としての環境を、それぞれに異なるものとして経験しながら生きていることもまた、確かなことなのである。そしてそのような事実を踏まえなければ、生物や、生物によって構成される生態系についての正確な理解は期し難いであろう。要は、「ある主体にとっての客観的世界は、いかなるものであるのか」を認識することは、その「主体」を理解する上で必要不可欠であると考えられるのであり、したがって「生物はそれぞれ固有のものとして構成された環境を生きている」という構成主義的環境観の発想は、科学の見地から適切に評価されなければならない。

## 5. 「我困惑ス。故ニ世界アリ」

ここまで「客観的世界」という言葉を、あたかも説明不用の常識的言辞であるかのごとく使用してきた。しかし量子力学における観測問題などを根拠として、主観と客観の分離不可分性を主張する議論も盛んになってきており、甚だしくは、VR の高度な発展および、それを技術的基盤とした極めてリアルなコンピュータゲームの急速な発展を、おそらくは背景として、「われわれの住むこの世界はシミュレーションである」という仮説まで登場し、真剣な議論の対象となってきた（6）。こういった状況を踏まえた上で、改めて「客観的世界」について「環境における主体」にこだわってきた立場から述べてみたい。

そもそも主体にとっての「現実」とは、主体として在り続けるために対処を迫られる「課題」であり、そして「環境＝主体にとっての客観的世界」とは、この「相互に絡み合った課題の束」に他ならないのであって、これら「対処を迫る課題」群の根源にあり、課題群を生成するものこそが「客観的世界」なのである。そして、この客観的世界が含有しているところの構造や傾向、規則性や機構こそが主体にとっての課題群を生成しているのであり、われわれ人類は長い時間を費やすなかでこれらを「法則」として認識することで「科学」と言う営みを進展させ、あるいはそれへの知見を基にして「技術」を発展させることにより、生活をより良いものに——戦争や環境破壊による被害の拡大というダークサイドを伴いつつも——してきたのである。

したがって、主体にとってその主体としての存立を脅かす可能性がある、すなわち「困惑」の対象となる課題群は、主体の意のままにならぬ「他者」としてその面前に屹立するがゆえに、主体にとって「客観的」なものとならざるを得ない。そしてそのような課題群を生成するものとしての世界もまた、主体にとっての「客観的世界」たらざるを得ないのであるから、デカルト風に言うならば、「我困惑ス。故に世界アリ。」ということになるのである。

## おわりに

本稿を執筆している筆者も、そして拙稿を読んでいただいている読者も、おそらくは日々の課題に困惑し、対応を求められているところの「主体」であるはずであるし、そのようなものとして、われわれはともに「客観的世界」にて、しかもそれを互いに異なる「環境」として受け止めながら活動する存在であろう。世界なるものが総体として、われわれの想像あるいは表象を絶するものであることは確実であろうし、だからこそ「シミュレーション仮説」などというものが登場する余地もあるのだろうが、しかし、そのようなものとしての世界が、われわれの困惑の源泉としてわれわれの主観性の外部に存在するところの「客観的世界」としての側面を持っていることもまた、われわれ主体にとっては確かなことである。そして科学はいずれの日か、われらが「客観的世界」が、もしかしたら主客分離が不可能であったりするような世界の在り方のなかにどのように位置づけられるのか、明らかにするはずなのである。

## 注

- 1) 本稿の 1 節～4 節の内容は、(南 2014、南 2020、南 2022) の内容をまとめたものである。
- 2) 「外界」という契機的环境概念における位置づけについては (南 2020) を参照のこと。
- 3) 石毛直道は「環境観の一般的モデル」なる文章において、18 世紀の百科全書派の所説を引用しつつ、「放射性荷電子、水滴、空気といった生命をもたぬ無機物の相互関係においても環境という概念は成立する。」「物理学においては『運動する物質』という主体は無機物であってもさしつかえなく、その運動は自己の内発的な力を持つものではなく、他の物質すなわち「外界からの運動に必要な必要なエネルギーを与えられたものでもかまわない。ともかく『運動する』こと、すなわち状態の変化というものが佳境を規定するうえでたいせつなことがすでに表明されているのである。」(石毛 1978、471 頁) と述べているが、「運動——この場合は単なる位置変化——する物質がなぜ環境の主体であると言えるのか」については、一切説明していない。この文章は (石毛 2012) においてもそのまま収録されており、解説においても特段の言及があるわけではないので、近年に至るまでこの見解が保持されているのは明らかであろう。
- 4) たとえば (カルボ 2023, pp150-160)
- 5) 清水の環境概念については、(清水 1958) を参照の

こと。

6)「シミュレーション仮説」については、(バーク 2021)を参照のこと。

#### 参考文献

石毛直道編、『環境と文化 人類学的考察』、日本放送出版協会、1978 年。

石毛直道、『石毛直道自選著作集第 9 巻 環境論・住居論』、ドメス出版、2012 年。

カルボ、パコ著 山田美明訳 『プランタ・サピエンス 知的生命体としての植物』 KADOKAWA 2023 年

清水幾太郎、「環境に関する試論」、『社会学ノート』、角川書店、1958 年。

バーク、リズワン著、竹内薫監訳、『われわれは仮想世界を生きている』、徳間書店、2021 年。

南 有哲、「環境概念についての考察」、『三重短期大学生活科学研究会紀要』62 号、2014 年。

南 有哲、「家政学の対象としての『内部環境』について」、『家政学原論研究』No. 54、2020 年。

南 有哲、「清水幾太郎における環境概念について」、『地研年報』27 号、2022 年。